



洋書輸入協会会報

Vol. 29 No. 4 (通巻335号) 1995年4月

理事会報告

4月21日(金)

(一) 3月分収支及び1994年度決算報告

4月13日(木)開催の総務委員会で審議の3月分収支及び1994年度決算(案)並びに1995年度予算案について総務委員長報告を承認した。

(二) 定時総会開催のご案内

1995年度定時総会の開催通知および1994年度の決算(案)、1995年度予算案について4月末全会員宛郵送されることが確認された。

なお、開催日については前述通り5月26日(金)であるが、未定であった会場が箱根湯本温泉の“ホテルおかだ”に決定した旨報告された。

(三) 定時総会議題及び進行

総務委員会より提出された上記総会の議事及び進行について検討、審議し一部訂正の上了承した。

海外ニュース

1982年～1993年出版業界の売上推移

Association of American Publishers (AAP) が最近明らかにしたところによると、1982年から1993年の間の出版業界における売上は年平均7.5%の割合で増加しており1992-93年の1年間では6.4%増となっている。1993年の売上は総額180億ドルとなっている。

10年間の推移を分野別にみると、トレード書の中の児

童向けペーパーバックが最も売上の伸びた部門で、15.3%増。児童向けのハードバックの売上もペーパーバックについて好調で、12.7%増となった。一方伸び率が最低を記録したのはメールオーダー部門で、僅か0.5%増となった。

トレード書のうち一般向けのハードバックとペーパーバックは、児童向けのそれについて順調で1982-93年間にそれぞれ11.5%と10.2%の伸びとなっている。1992-93年の1年間では一般向けペーパーバックがもっとも伸び、22億から26億ドル、14.9%増となった。メールオーダーは業界最下位で、1992-93年で僅か4.6%の伸びとなっている。

米国出版業界売上 (Net Sales.) 単位100万ドル

分 野	1982	1992	1993	'92年比
トレード書全体	1513.0	4661.6	5023.3	7.8%
一般向 Hard	770.8	2222.5	2553.6	14.9%
一般向 pap.	458.2	1261.7	1333.6	5.7%
児童向 Hard	206.9	850.8	767.4	9.8%
児童向 pap.	77.1	326.6	368.7	12.9%
宗教書	425.5	907.1	931.5	2.7%
専門書	1536.4	3106.7	3320.5	6.9%
ブッククラブ	522.9	742.3	804.7	8.4%
メールオーダー	568.6	630.2	601.2	-4.6%
マスマーケット pap.	703.4	1263.8	1359.8	7.6%
人学出版局	125.4	280.1	292.9	4.6%
カレッジテキスト	1206.1	2084.1	2140.4	2.7%

目 次

理事会報告	1	うちの会社	3	訂 正	6
海外ニュース	1	海外出張零れ話	3	東京の坂と橋と文明開化50	7
東京国際ブックフェア'95見聞記...	2	通関統計(後編)	4	広 告	8

幕張の風は冷たかった

(東京国際ブックフェア'95 見聞記)

「幕張」という地名をきいて、私たち昭和初期生れのものがまず思い浮かべるのは「海岸」であり、そこでの「潮干狩り」である。『校長満悦洋裁学校潮干狩』というのは、「変哲」こと小沢昭一氏のものした名句(?)であるが、時移り星変って今日の幕張はゼネコン大魔神の手によって、驚くような半未来都市に変貌してしまった。

「国際書籍展」を訪ねて「幕張メッセ」の入口の階段を昇りきったところで後ろを振り返れば、白い広場が眼下にひろがる。折から「阪神大震災」より二旬余しか経ていない日とあって「泥状化」という言葉が頭を横ぎる。この白い広場が泥で覆われる日がきませんように、聳えたつ高層ホテルが傾くときがありませんように、と祈らずにはいられない。いずれにしる「洋裁学校の校長先生」の心境には程遠い昨今の幕張ではある。

2月8日～11日の4日間にわたって開かれた「東京国際ブックフェア'95」は入場者28,649を数え(主催者発表)その面からは成果をあげたといえよう。会場のセッティングもこの幕張で2回目とあって、手慣れたものとなってきたように思われる。ちょっと「うら淋しい」思いをした一昨年の晴海における第一回ブックフェアと比較すれば格段の進歩といってよからう。

会場を一巡して、今回は中国を初めとするアジア諸国の出展が多いことに気がつく。詳しい数字をチェックしたわけではないが、日本の出版社等も昨年よりずっと多数出ているようだ。その反面、欧米側の出展ブースはすこし減っているのではなかろうか。

それにしても、書籍展というのはくたびれるものである。初めのうちは、興味をひかれる本を展示棚からとりだして頁をくったりして見るのだが、やがてそれも億劫になり、ブースを斜めに眺めるようになる。

今回が初めて設けられた「洋書バーゲンコーナー」が、なかなかの活況を呈しているのも昨今の「価格破壊」の波の影響か…。買うお客の方もマメに目を通して、同じタイトルが複数の売り台にあると、安いのをとりあげ、すでに小脇に抱えているのを戻しに行く。もっと馴れた人になるとスリッパを入れ替えてしまうとか。売り手の方もボヤッとしてはられません、とは係の某氏から伺った話である。

夕暮れの高架歩道から振りかえるメッセの建物とその周囲に聳えるホテル群に、来年のブックフェアもどうかご無事で、と心中ひそかに祈りながら帰途につく筆者の頬に幕張の風は冷たかった。(メクレンブルグ・鈴木)



カンダブックトレーディング株式会社

地学、地質学というと博物館の恐竜化石を想像されたり、地質学専門だから“Geology”とつく本のみを扱っていると誤解されることが多い。宮沢賢治を好きな方は彼が購入した洋書と理解していることでしょう。

しかし、学問の進歩とともに近年、大学の教室名が地学、地質鉱物学教室から地球科学、物質科学、自然環境科学、あるいは宇宙地球惑星科学教室などと名称が変更されてるように非常に範囲が広がった。わかりやすくいうと、活断層、火山、鉱物や古生物の洋書が専門です。

昭和45年創立、理工学書からカタログ分類でいうとEARTH & PLANETARY SCIENCEを専門として20余年になります。

昔のことを振り返るゆとりもないが、事務合理化や入手期間の短縮などのため経費が増大する一方、円高また円高でガムシャラに過重労働でカバーしているこのごろです。

それでも、好きな自然写真や山歩きの時間はあるもので、もっと仕事に時間を取るべきかと反省しております。

熟年になると耳が遠くなるそうだが、“仕事を趣味とすれば”という声があちこちから聞こえてくるような気がします。

“地球をいかに守るかの地球科学”

(石村善造)

海外出張零れ話

外国がこれほどに身近になろうとは、恐らく4、50年前に予想出来たのは相当レベルの高い知識層に限られていたかも知れない。少なくとも、戦後の残照のなかで、草を食み、種芋を食らい、青春を楽しむチャンスにも恵まれなかったわれわれのハイ・ティーン時代にはあまり考えたこともなかった。只アメリカは遠い外国で、猛烈に輝いて見えた。そのアメリカへ行きたいと勉強したいろいろな事柄は今でもしっかりと「灰色ならざる」脳細胞の中で生きている。若さとは素晴らしいものである。

“Grandma picked her geese last night!!” (ばあちゃんがきのうの夜ガチョウの羽をむしたネ。) こんな表現を若いアメリカ兵から聞いたのは二十歳を少し過ぎた頃だったと記憶している。たどたどしい英語で「それ何のこと？」ときいたら「きのうの晩、大雪が降ったと、言ったんだ」と彼が言った。なるほど、羽毛で真っ白なんだ、と思った。東京が雪に被われていた朝だった。ヨーロッパではガチョウはかなり popular なよ

うで、お話にも出てくる。

Geese は Goose の複数形で、関連語も幾つかある。辞書を引いて見ると gooseflesh, gooseneck, goose-step 等があり、調べてみるのも一興である。

1960年12月のクリスマスを迎えたニューヨークは「私の記憶が確かならば」何年振りかの大雪であった。Streets は Sanitary Department が繰り出す除雪車が積もった雪を吸い込んで上方に突出したダクトから並走するトラックのベッドへ吹き出す。一杯になると次のトラックと交代する。ニューヨーク着後2ヶ月目の私には真新しい光景であった。東京は未だ10年も20年も遅れている時代であった。厚手のスポーツ・シャツ1枚の出で立ちで氷点下10数度の中に立ち尽くし見惚れていて、風をひくよ、と心配されたのをよくおぼえている。ニューヨークで除雪に時間を掛けるのは Sanitary Department だけではない。各建物の前の通りはそこに住むか使用しているテナントの責任である。

滑って骨折した人に怒鳴り込まれ、治療代を請求されないためである。日本では今でもこの責任はないようである。

1992年1月、ボルティモアからシカゴへ向かうフライト、シカゴを襲った低気圧のため吹雪いていた。オヘア空港に着陸できずセント・カウンティー国際空港へ。そこから航空会社が仕立てた車でオヘアへ向かった。アメリカでは雪路でもチェーンを使用しないのが普通である。降り続く雪の夜道を約6時間かけ無事シカゴへ到着した

のが夢のようであった。丁度真夜中になっていた。

これらの大雪に遭遇した時にも特に思い出さなかった“Grandma is picking her geese”が最近の東京の雪でよく頭に浮かんでくる。灰色の脳細胞が活性化したのか、それとも歳のせいで昔のことが段々と思い出されるようになったのか。子供の頃より、語学者だった父の「門前の小僧」であった私は、外国語のこう言った表現が今でも大好きである。(R. A.) 以上

1994（平成6）年1～12月、洋書輸入通関統計とその分析（後編）

洋書輸入協会顧問 相 良 廣 明

5. 主要国以外からの洋書輸入状況

（表8） 主要6カ国以外で1994年1～12月に、書籍又は新聞・雑誌のいずれかで1,000万円以上日本へ輸入している国の一覧表

（単位 百万円）

国名	書籍	新聞・雑誌	計	総合順位	前年順位
韓国	153	68	221	14	14
N. KOREA	26	1	27	24	19
中国	282	140	422	10	10
台湾	180	6	186	15	17
香港	1,437	324	1,761	6	5
タイ	12	40	52	21	21
シンガポール	1,247	619	1,866	5	7
マレーシア	40	2	42	22	25
印度	18	2	20	25	22
デンマーク	17	94	111	19	15
アイルランド	20	112	132	17	16
ベルギー	26	9	35	23	24
スウェーデン	131	7	138	16	13
イタリア	358	328	686	9	9
ロシア	307	2	309	12	23
オーストリア	19	59	78	20	18
カナダ	117	11	128	18	12
ブラジル	13	286	299	13	11
オーストラリア	305	15	320	11	20

計19カ国

（注） 書籍には単一シート、辞・事典を含み、新聞・雑誌には週4回以上を含む。

〔分析〕

日本の洋書輸入先の総合順位は、1位・米国、2位・英国、3位・ドイツ、4位・オランダ、とここまでは昨年と変わらないが、5位・シンガポール（昨年は7位）、6位・香港（昨年は5位）、7位・フランス（昨年は6位）、8位・スイス・9位・イタリア、10位・中国（以上3国は昨年と同じ）で、これでベスト・テンを形成している。以下で昨年と比較して目立つのは、ロシアが23位から12位へ、オーストラリアが20位から11位へという所であるが、スウェーデンが昨年26位であったのが今年は姿を消した。またこの表にはないが、辞・事典にウクライナが、僅か530万円程ではあるが計上されているのが珍らしい。

なお香港、シンガポールなどには、日本から印刷を依頼したものも含まれている。

6. 洋書関連商品の輸入通関統計表

（表9） 1994年1～12月、洋書関連の商品別輸入通関統計一覧表

(単位 百万円)

品 目		1993年 価 額	1994年 価 額	前年比
幼児用の絵本及び習画本 楽 譜		1,744 639	1,723 749	% 99 117
地図・海図 その他これ らに類する もの	地球儀・天球儀	117	146	125
	製本したもの	61	81	133
	その他のもの	208	206	99
	小 計	386	433	112
葉 書		731	923	126
カレンダー	紙製又は板紙製	1,133	1,343	119
	その他のもの	134	149	111
	小 計	1,267	1,492	118
その他の印刷物	広告・商業用カタログなど	2,802	3,616	129
	写真	629	1,011	161
	絵画・デザインなど	2,827	3,523	125
	その他のもの	16,774	20,149	120
	小 計	23,032	28,299	123

(注1) 楽譜は、印刷したもの及び手書きのものに限るものとし、製本してあるかないか、又は挿絵を有する有さないかを問わない。

(注2) 地図、海図その他これに類する図は、製本したもの、壁掛け用のもの、地形図および地球儀、天球儀その他これらに類するものを含むものとし、印刷したものに限る。

(注3) 葉書は、印刷したもの及び挿絵を有するものに限る。また個人のあいさつ、伝言または通知を印刷したカードを含む。なお、この品目は'87までは、「絵葉書、クリスマスカード、その他これらに類する絵入りのカード」となっていた。

(注4) カレンダーは、カレンダーブロックを含むものとし、印刷したものに限る。

(表10) 洋書関連商品輸入価額の1980年、1984年と1994年の対比表

(単位 百万円)

品 目	1980	1984	1994	'80:'94	'84:'94
絵 本	283	403	1,723	% 609	% 428
楽 譜	596	670	749	126	112
地球儀・地図・海図など	1,244	960	433	35	45
葉 書 等	143	315	923	645	293
カレンダー類	488	617	1,492	306	242
写 真	471	255	1,011	215	396
印刷絵画・デザイン	471	642	3,523	748	549
その他の印刷物	3,270	5,434	20,149	616	371

[分析]

1990(平成2)年までは高度成長を続けてきた洋書関連商品は、'91年は地図・海図と写真が激減、他は横這い、'92年は絵本とカレンダーを除いて他はダウン、'93年は絵本だけが前年比アップし、他は大幅ダウン、'94年に絵本の横這い以外すべてがかなりの上昇を示している。'90年を頂点として'91~'93には大きくダウンしている洋書関連商品であるが、それでも'80年比'94年及び'84年比'94年の指数(表10)を見ると、地球儀、地図、海図などの半減、楽譜の微増を除いてはすべて大幅増となっている。書籍、新聞・雑誌の、'80年比'94年が117%(表4参照)という数字とは大変な違いで、洋書本体の書籍、新聞・雑誌の成長率がいかに悪いかということを如実に示している。

7. マイクロフィルムと文献情報検索用磁気テープ

(表11) 1994年1~12月、マイクロフィルムの輸入通関統計表と'89年以降の推移

(単位 百万円)

品 目	'88	'89	'90	'91	'92	'93	1994	前年比
マイクロフィルム	28	22	780	767	632	613	524	% 85

(注1) マイクロフィルムは、品目番号表の変更によって1988年から独立した項目となったので、同年以降の経過を一覧表としたが、数字上では'88~'89年は全く実態を表さず、'90年から実情に近い数字となっている。

[分析]

'94年の輸入先の上位3国は、1位米国で346百万円(前年比81%)、2位英国で53百万円(64%)、3位ドイツで52百万円(100%)と、英・米両国の落ち込みが大きい。

(表12) 1994年1~12月、文献情報検索用磁気テープの輸入通関統計表と'89年以降の推移

(単位 百万円)

品 目	暦 年	価 額	前年比
「磁気テープ」のうち「幅が6.5ミリを超えるもの」の中で「その他のもの」	1989年	5,013	164
	'90	5,650	113
	'91	4,912	87
	'92	3,708	75
	'93	2,013	54
	'94	1,540	77

(注) この品目はすべて文献情報検索用磁気テープという訳ではなく、この価額の中に同テープが含まれているということである。

[分析]

文献情報検索用の磁気テープも、1990年を頂点として以降減少の一途をたどり、'94年は'90年の27%にしか過ぎない。

8. 輸出

(表13) 1994年(平成6)1～12月、書籍、新聞・雑誌の輸出通関統計表

(単位 百万円)

分類	品 目	'93.1～12 輸出価額	'94.1～12 輸出価額	前年比	構成比
書籍	単一シートのもの	542	433	80	
	辞典及び事典	227	205	90	
	その他のもの	22,385	19,874	89	
	小 計	23,154	20,512	89	80.3%
新聞・雑誌	一週4回以上発行	220	222	101	
	新聞	3	3	100	
	雑誌その他の定期刊行物	4,726	4,793	101	
	小 計	4,949	5,018	101	19.7
計		28,103	25,530	91	100.0

(表14) 1989～'94年、書籍、新聞・雑誌の輸出通関統計推移表

(注) 下記の表のうち指数は、1985(昭和60)年を100として算出したもの。

(単位 百万円)

暦年	書 籍			新聞・雑誌			計		
	価 額	前年比	指数	価 額	前年比	指数	価 額	前年比	指数
1989	29,714	104	89	4,478	106	75	34,192	105	87
'90	31,730	107	95	5,141	115	86	36,871	108	94
'91	29,296	92	88	5,085	99	85	34,381	93	88
'92	28,056	96	84	5,163	102	86	33,219	97	84
'93	23,154	83	69	4,949	85	83	28,103	85	71
'94	20,512	89	61	5,018	101	84	25,530	91	65

(表15) 書籍、新聞・雑誌計の、輸入と輸出の比率推移表

分類	1979	'84	'86	'87	'89	'90	'91	'92	'93	1994
輸 入	% 70	50	44	50	55	58	54	58	59	% 61
輸 出	30	50	56	50	45	42	46	42	41	39

[分析]

輸出は、1985(昭和60)年の39,364百万円を頂点として、その後'88年まで連続下降し、'89年と'90年は上昇して以降4年連続で下降している。やはり円高による値上がりの影響が最も大きなものであり、世界的な日本語熱の衰退が次に考えられよう。輸入との対比で見ても、この10年間で最低のパーセントとなっている。書籍だけを取り上げても、需要の多い主要国が台湾を除き軒並みに減少している。

(表16) 1994年1～12月、書籍の主要輸出先5カ国の輸出通関統計表

(単位 百万円)

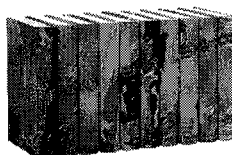
国 別	米 国	英 国	ドイツ	韓 国	台 湾
1993年輸出価額	9,635	1,327	1,538	1,317	1,078
1994年輸出価額	8,449	1,102	1,269	1,093	1,109
前 年 比	88%	83	83	83	103

(終り)

訂 正

前号(1995年3月号)第8ページ掲載の
ドゥーデン ドイツ語大辞典 全8巻 第
2版とマイヤー・新百科事典(全10巻)の
広告にそれぞれ実物写真を入れましたところ、印刷のミスによりレイアウトが逆でした。

右記の通り訂正しお詫びいたします。



DUDEN DAS GROSSE WÖRTERBUCH DER
DEUTSCHEN SPRACHE IN ACHT BÄNDEN

特価 各巻¥ 7,480
¥59,840

MEYERS NEUES LEXIKON IN 10
BÄNDEN

上製クロス装 ¥140,800
並製クロス装 ¥107,800

日本総代理店 日本出版貿易株式会社

港区の坂と文明開化〔8〕 公使館めぐり

丸善・本の図書館 鈴木 陽 二

◆日本近代化に果たしたイギリスの貢献 (1)

前回までイギリス公使館員の日本研究について紹介してきたが、もちろんこのほかにも例えば日英同盟の締結に努めた C. M. マクドナルド卿、『薩摩反乱記』で西南戦争の経過を記した A. H. マウンシー、『日本史』全3巻の大作を著した G. B. サンソム卿などのすぐれた日本研究家が公使館から生まれた。しかし、この辺で日本近代化初期においてイギリスが果たした役割・貢献を概括することで「イギリス公使館の巻」を終えることにしたい。

明治政府は明治10年代半ばになると政治制度や学術の範をドイツに求めることで近代化を推し進めたが、幕末から明治初期の、いわば近代化黎明期においては圧倒的にイギリスに依存した。留学生で見ても、幕府時代に中心であったオランダやフランスへの派遣に代わって明治4年にはイギリスが官費・県費・私費合わせて107名に増加し、諸国間で圧倒的多数になる。お雇い外国人でも、明治14年から31年の統計で官雇いが766名、私雇いで3,411名とイギリスが他国を凌駕している。これらの数字は、明治政府が国家建設の初期にいかんにかイギリスの知識と技術と制度の導入に傾注したかを表している。

では、具体的にどういう形でイギリスが日本近代化にかかわったのかを官雇い英国人の多い部局を拾ってみると大蔵省(16名)、海軍省(29名)、文部省(25名)、工部省(185名)などである(明治7年の統計)。文部省はほとんど教師なのであとで解説するが、特に数字が目立つ工部省の場合、鉱山・鉄道・灯台・電信などの部門が多く、こういう緊急に整備を必要とした分野でイギリスの技術をいち早く活用した様子が見える。ウォートルス(T. J. ウォーターズ)は大蔵省のお雇いとして大阪造幣工場の建築を行い、また銀座煉瓦街建設を指導した。初代の鉄道兼電信建築師長として来日した E. モレルは横浜・新橋間の鉄道建設に携わり過労のため結核におかされて日本で没した。海軍軍楽隊を創設して「君が代」(現在の曲とは違う)を作曲した J. W. フェントン、日本の灯台の父と呼ばれた技師 R. H. ブラントン、日本で初めての雑誌『ジャパン・パンチ』を発刊し、洋画家

を育てた画家の C. ワークマン、『ジャパン・メイル』を創刊した F. プリンクリーは海軍砲術学校や工部大学で数学を教授したが、日露戦争時代にはロンドン『タイムズ』の日本通信員となって日本に肩入れした報道を送った。工部省電信寮建築技師の J. モリスは関門海峡や津軽海峡での海底電信架設にかかわるなど電信網の整備に尽力した。このようにイギリス人の貢献によって国家の新しい姿が着々と築かれていったのであった。お雇いの点で言えばこの制度が一応終えんするまでイギリスの優位性は変わらなかったようである。

明治政府はお雇い教師による教育が実を結んで、日本の学者が育っていくにつれて外人教師を解雇していくが、学術の摂取がドイツに傾斜するまではイギリスの学問が中心であって、近代化黎明期におけるイギリス教師陣による欧米学術の扶植は計り知れない大きなものであった。たとえば、工部大学校の教頭に招聘された H. ダイアーは工部大学校が“Dyer's College”と呼ばれたほど大きな存在であったし、彼の尽力による日本近代工学の発展と工学教育制度の確立は“Nature”誌などにも紹介され、海外で高く評価された。同じ工部大学校で教鞭を執った W. E. エアトンは日本における電気学の大恩人となったし、鉱山学と冶金学を教えた J. ミルンは地震の研究にも取り組み、地震学会を創設するなど日本の地震学を育てた。開成学校の教師として招聘された J. サマーズは日本で最初の英文学講座を開き、初めてシェイクスピアを講義した。イギリス公使館付医官であった W. ウィリスはのち医学校の教師に転出し、ドイツ医学の導入まで中心的な医学者として日本に西洋医学の基礎を築いた。東京帝国大学で言語学を教授した B. H. チェンバレンはイギリス日本学の泰斗としてすぐれた研究成果を挙げた。J. コンドルは工部大学校と帝国大学工科大学の教師として優秀な人材を育てて日本の近代建築の始祖となり、多くの洋風建造物を残した。

お雇い外国人に支払われた報酬は場合によって総理大臣を越える高給であったが、しかし、日本近代化に示した彼らの献身的な努力は金銭面だけではとうてい理解できないほど大きなものであった。

*The 7th
International
Conference on
Electronic Publishing*

マルチメディア時代を迎えて

第7回
**電子出版
国際会議**

21世紀の学術情報提供
「出版社の展望」

日 時：6月27日(火) 10:00~17:00
会 場：経団連会館会議場
(〒100 東京都千代田区大手町1-9-4)
参 加 費：15,000円
(昼食費および消費税を含みます)
定 員：100名
内 容：基調講演、一般講演、各出版社の
デモンストレーションおよび展示

■スピーカー

Dr. William Marovitz
(Churchill Livingstone International, U.S.A)

Dr. Jurgen Swienty-Busch
(Beilstein Information GmbH, Germany)

Mr. Keith MacGregor
(Institute for Scientific Information, U.S.A)

Dr. John Buckingham (Chapman & Hall, UK)

その他国内スピーカー1名 予定

●申込み先

ユサコ 株式会社

本社：〒105 東京都港区新橋1丁目13番12号
マーケティング・グループ

TEL.03-3502-6472 FAX.03-3593-2709

0120 フリーダイヤル **0120-660172**

1995年4月 通巻第335号 洋書輸入協会
〒103 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室

編集者 神田 俊二

☎(03) 3271-6901 FAX. (03) 3271-6920

印刷所—藤本綜合印刷株式会社